

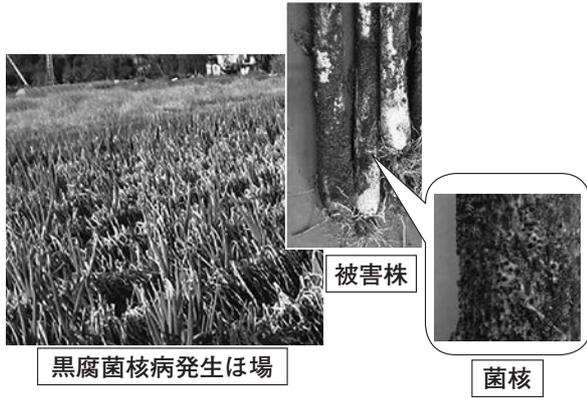
# 「ねぎ黒腐菌核病対策」

11111111

深谷市では古くからねぎが栽培されてきました。しかし、長年の連作の影響や、気象条件等により土壌伝染性の黒腐菌核病が多く発生し、生産が不安定になるほ場が見られています。

## 1 黒腐菌核病の症状

初期は葉先枯れ等の症状が見られ、進展すると外葉は黄化し、葉鞘部に白いカビを生じた後、黒変し、軟化腐敗します。また、被害部分には大量の黒色の菌核を形成します。



## 2 病原菌の特徴

①比較的に低温を好み、発育適温は15～20℃です。気温が10℃前後の時に激しく蔓延します。(25℃以上では発病しにくくなります。)

②被害部分に形成する大量の菌核が土壌中に残り、長年にわたり伝染源となります。

③排水の悪いほ場や、pHが低いほ場では発生リスクが高くなります。

## 3 防除対策

単独の対策で十分な防除効果を得ることは難しいので、土壌消毒・耕種的対策・ねぎ生育期の薬剤処理を組み合わせた対策をとることが必要です。

①土壌消毒により、土壌中の病原菌密度を下げます。土壌水分や外気温に注意して処理を行いましょう。その際には、必ずピニル等で被覆し、処理効果を高めます。その後、窒素分の少ない完熟堆肥や微生物資材を施します。

②ねぎの仲間（ねぎ・たまねぎ・にんにく・らっきょう・にら等）の連作を避け、他の作物や緑肥作物を作付するようにします。

③滞水しないよう、排水対策を徹底します。

図 ねぎ生育期における黒腐菌核病防除の農薬処理例

作型	3～6月頃	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
年内どり	処理時期：定植後 ※モンガリット粒剤	9月中旬頃	10月下旬頃					
1～2月どり	6kg/10aを株元散布 (6月までに定植を行う作型の場合)	☆農薬処理①	☆農薬処理②		12月中旬頃 ☆農薬処理③			
3月以降どり							2月 ☆農薬処理④	
夏どり			処理間隔 約1か月半	処理間隔 約1か月半	定植後 ☆農薬処理①			2月下旬～3月上旬頃 ☆農薬処理②

※モンガリット粒剤を定植後に使用する場合  
冬季に定植する作型では生育が抑制されるおそれがあるので使用をさける。  
☆農薬処理①～④の農薬は、表の黒腐菌核病 農薬例を参考にして選ぶ。

④栽培前に石灰等で土壌をpH6.0～7.0に調整します。  
⑤被害残渣は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理します。  
⑥図のねぎ生育期における黒腐菌核病防除の農薬処理例や表の黒腐菌核病農薬例を参考に、農薬を使用します。時期を逃したり、

表 黒腐菌核病 農薬例

作用機 構分類 (FRAC コード)	農薬名	希釈倍率 ・使用量	使用 方法	使用時期	本剤の 使用 回数	散布液量
7(C2)	バレード20 フロアブル	2,000倍	散布	収穫前日まで	3回 以内	300リットル /10a
	アフエット フロアブル	1,000 ～2,000倍	株元 灌注	生育期 (ただし収穫 14日前まで)	2回 以内	1リットル/ 平方メートル
12(E2)	セイビア フロアブル20	1,000倍	散布	収穫前日まで	3回 以内	300リットル /10a

散布液量が少なかったりすると、農薬処理の効果が低くなる可能性があります。適期に、確実に処理しましょう。

（農薬登録内容は令和元年5月15日付 農薬登録情報）  
農薬を使用する際は、必ず使用農薬のラベルを確認するとともに、飛散防止に努めましょう。

「広報誌みどりの風5月号」、秋冬ねぎの葉を食害する「ネギアザミウマ」「ネギハモグリバエ」対策に誤りがありました。訂正してお詫びいたします。  
P10別表 薬剤名  
アクタラ粒剤水溶剤  
↓  
アクタラ顆粒水溶剤

